

誰が星の王子さまを殺したのか

安富 歩著



本書は「星の王子さま」の謎を鮮やかに解き明かす。第2次世界大戦中、サンテジジューベリがナチスから逃れて米國に亡命し、アフリカへ志願出征する直前に発表された「星の王子さま」は、政治的な意味も含め、さまざまな解釈を生んできた。しかし、謎めいた登場人物はなかなかその「真のメッセージ」を明らかにしてくれない。

本書ではこれまで繰り返されてきた解釈を覆すような議論を展開する。小さな手がかりを糸口に切り込んでゆくその手法は見事というほかない。

副題にもある「モラル・ハラスメント」とは、一見無害なコミュニケーションを装って人の心を支配し、かつその苦しみは自身のせいでと誤信させる精神的暴力。それは夫婦や恋人、親子、友人関係、また会社や国家と個人の間にあつて、人間の魂を奪う。ハ

死に至る謎、鮮やかに解く

明石書店 2160円

ラスメントにとらわれたとき、人間は自らの魂の主人であることをやめてしまふ。そしてそのさまよいを「自由」である取り違える。王子の苦悩はここにありと本書は言う。

秀逸なのは「詞いならず」という言葉に込められたトリックを明らかにした点である。気難しいパラに振り回される王子、本来はハラが王子の心を支配し、詞いならしたにちかかわらず、キネネは王子がハラを飼ひなうとした「詞いならした」のに対して責任がある「王子を追いつめる」。

次に「ロワバミ」にまたたつウの絵、手をかりに、王子を死に追いやつたラスメントの悪意が隠蔽されていることを指摘する。そして、作中で重要な役割を果たすハオハブの木の新な解釈が示されることだつて、本書は意外な一貫性をもって結論を導き出す。

王子はなぜ自分の星を去らねばならなかつたのか。自由に旅をしてはいるが、王子はなぜかそこに自らをかせて倒れたのか。その謎を解く旅を、夜空の深い色と星に彩られたこの美しい本とともに味わつてほしい。それはわれわれ自身のとつた旅を解く旅でもある。

(深尾葉子・大阪大准教授)

救命医が語る死生観

おかげさまで生きる (矢作直樹著)



幻冬舎 1080円

交通事故や殺傷事件、自殺、脳卒中、心筋梗塞……。死のふちに立つ重恩を迎え、分け隔てなく全力で対応する。なのに、救える命と帰らぬ命があるのはなぜか。救命現場で格闘する著者が、自らの非力と医療の限界に直面する中で到達したのは、人は一人の「目見えしない」意識を超えた「心」によつて生かされておき、生死の境は「神」の領域に属する、との世界観だつた。

魂の不滅を説き、来世の存在を説く「スピリチュアル本」は山ほどある。「おかげさまで」を支えられたが、科学の最先端で無数の死に向き合う体験に裏感謝し、苦業を学びに変打たされた言葉は重みが、ええと今を生きて。そう、東大病院の現役医師に、それが、この人生の師による平易なエッセイ集という目新しさも手伝い、発売後3カ月で発行部数25万部の大ヒット。版元かけた自身の経験も踏まには「心が安らぐ気持ち」があつた。なご反響が相次ぎ、担当編集者は「理想を守つて、死別した家族や友人とも必ず再会できる」とも。被災地の人々や自殺遺児、さらには人生に疲れた、失意の底でうつさるる全ての人々に届けたい一冊。

(意)

プロット・アゲンスト・アメリカ

柴田



その前提を成すのが、史実では1933年から45年までの12年間、建国以来最長の任期を務めた第32代大統領フランクリン・デラノ・ローズヴェルト大統領が、仮に4選せず対抗勢力に惨敗していったらという思考実験である。

ローズヴェルト大統領は大恐慌にあえぐ30年代アメリカをニューディール政策により救い出し、第2次世界大戦勝利をお膳立てして絶大な支持を得た大統領だが、2004年に原著が刊行された本書では、彼は1940年、3選を懸けた選挙のさいに、ナチスドイツと親しくユダヤ主義思想を持つ有能飛行家チャールズ・リンデンバークに敗北を喫してしまう。

その結果、アメリカは連合國側

思考実験で描く一族の傷

集英社 2376円

北の村と南の島は鮮やかに好対照で、合わせ技一本というところでしょう。

北の村と南の島は鮮やかに好対照で、合わせ技一本というところでしょう。

北の村と南の島は鮮やかに好対照で、合わせ技一本というところでしょう。

やがて藤尾の背後には、ナノの黒幕があることが判明。なぜ藤尾たちが

晩年の豊臣秀吉は、能に没頭した。この史実を伝奇的な手法で描いたのが、奥山景布子「太閤の能楽師」(中央公論新社・1994年)である。

山崎八幡宮に能を奉納する神人の新九郎は、遊女屋を営む母の藤尾から、秀吉に近づき能好きにしろと命じられる。新九郎の思惑通り、能に夢中になった秀吉は、金吾座の安照、観世座の身愛ら一流能楽師を呼び出して能を学び、細川幽斎、前田利家、徳川家康など有力武将を招き宮中で能を開演するまでになる。

歴史・時代小説

「太閤の能楽師」ほか



奥山景布子

静かだが圧倒的なス

これに、能の稽古で顔の意外な評価も面白。安定を取るか、秀吉を離れて芸を磨くか、秀吉の力を利用して一座の権を受けたい新九郎は、自分下した結論は、威を高めようと、安照の芸を究めたいと考え始が陰謀をめぐらせたりする。だが、秀吉に寵愛るので、大きな事件が起されている新九郎を取り直す契機になるのだ。

武田信玄の娘は、織田信長の忠と婚約したが、決別で破談となる。耕一郎一松は、(角川春樹事務所288頁)は、松岡武田家の滅亡を語る。高遠城で響くが、織田軍に追

ミッドウインター

定していた中高年だけでなく若く読者も多い」と

本と私

私の場合、「宗教学」という学問を長く専門としてきたが、もともと「比較宗教学」と呼ばれていた。一つの宗教ばかりを研究するのではなく、複数の宗教を対象とし、それらと比較する必要があるというわけだ。そういう学問上の性格からすれば、宗教学の研究がなれば、宗教学の研究者はさまざまな宗教について知るなければならない。日本の宗教を研究するからといって、神道や仏教だけを対象にしてはならず、キリスト教やイスラム教についても、それなりに勉強する必要があるのだ。

しかし、キリスト教はともかく、イスラム教になると、知識は限られている。身近に接するところがないので、なかなかそれについて学べない。難しい。だいたい、興味を抱くきっかけがあまりないのである。

その点で、井筒俊彦「イスラム文化」(波文庫)を読んだとき、衝撃は大きかった。なほ、イスラム教が、そういう宗教なのか、そ